

まほらいな市民大学の様子

令和6年11月30日（土）第46回高遠町桜大学第3講座

『 島村利正 作品とその世界 』

講師 長野吉田高校教諭 六川 宗弘 氏



六川宗弘 氏から、高遠出身の小説家・島村利正（しまむら としまさ 1912～1981）の作品と世界観について講演がありました。島村利正の生家は「カネニ」商店であった。小学校で文学に目覚め、14歳で奈良に出た。当時奈良には、志賀直哉、武者小路実篤、瀧井孝作が住んでいて、一緒に撮った貴重な写真があった。当日高遠町図書館蔵の写真や資料が講演会場に展示されました。17歳で東京狛江に出て生活をはじめ、24歳で結婚をし、小説家として執筆を続けた。

「小説 城址（しろあと）のある町」では、冒頭に高遠の町並みや通りの名前、人々の暮らし、季節の移り変わりが描かれ、その風景の描写から物語に引き込まれていく思いがすると六川氏は語った。風景描写から始まる他の小説家の作品が紹介され、小説の面白さを話された。島村利正は死期が近づいたとき、利正の部屋には「高遠城址と桜」の写真が飾られてあったという。「ふるさと高遠」がずっと利正の心の中にあり、心の支えであったと思われる。【風景の共有とは】同じ景色を何人もが見ている。世代が違う人間であっても、風景でつながっている。風景を通して時間的な連続（歴史）の中に自分がいる。と六川氏はまとめられた。

学生からは、「高遠や伊那町の古い写真が提示され、なつかしく、昔の暮らしぶりが思い出された。」「今まで島村利正のことは知らなかったが、貴重な資料を見させてもらい、活躍した小説家であったことを知った。」「六川先生は日本各地で資料を集められ、島村利正へ寄せる思いの強さを感じた。」「島村利正のふるさとの風景への思いが印象に残りました。」といった感想がありました。